

「霊障」「浄霊」に関わる“霊”とは何ものか

果たして霊魂なのか

“霊障”という言葉を使っているところ（宗教教団）では、必ず、その“障霊”を除霊させる、あるいは浄霊させるとして、ある方法を用いている。

- ①（既成宗教系教団では、）古来からの行法に準拠した方法
- ② 障られている人を一般にいう精神統一をさせる
- ③ 教主独特の方法
- ④ その他……いろいろな方式がある

ということにまとめられようか。

さながら秘法であるかのようにも思われるが、その方法で障霊なるものを追い出す、除霊する、浄霊するという。ここで問題にすべきことは、果たして、この方法によって、その障りのある霊を出したのか、除いたのか、浄めることができたのか、ということである。そして、それ以前に、その霊障と言っているものが、正真正銘の“ある特定の霊魂”によるもの（働き）なのであろうか。

この霊障を起こしている霊は“いわゆる霊“であるのか。何にしても、除霊を行う人たちは、霊障を受けている人たちに霊魂の存在を一応認めさせる必要がある。しかし、それを信じる人たちばかりではない。たとえば、今日の科学の上では霊魂の存在は認められていない。このことを建前に、その存在を否定しようとする。そういったことを一連の暗示、潜在意識によるものだとして否定しようとする。その多くの場合、教祖とか霊媒といわれている人の独断で、何かへボ理屈で誤摩化しているような印象を受けることもあり、この肉眼で見えない霊魂の存在の確認を必要とするところまで指摘されると、必ず“心霊科学”が解明しているとして、その存在を盾にとっている。そしてこれは国際的に認められた学問であるという。たとえば、東京にある“霊障”専門といってよい宗教法人の一つである某教団が言及していることもあり、文章化している。学問には国境はない。そして、彼らの言う通り、たしかに心霊科学は世界的に認められた新興科学の一つである。ところが、日本の学界は一般論から霊に関する研究については頼みかぶりしているのである。

ここでハッキリしておきたい点は……確かに心霊科学はその研究対象としている心霊現象の解明で、それにかかわる霊魂を発見して、その存在を認めている。それが新霊魂説（スピリチュアリズム）である。が、ただし心霊科学者のうちには、まだ霊魂を認めていない学者もいるものの、最近では、その人たちの多くはやはり霊魂存在を確認し

ようとする傾向にある。

しかし、霊魂を認めたからといって、この教団の人が言っているような“簡単なこと”で霊魂の存在を認めているわけではない。

その本質として霊魂は何れも個性をもっている。また、それぞれ、その霊魂の身元をたどる必要がある。

(註) 霊魂を分類すると、①自我霊、②帰幽霊(人霊)、③動物霊、④自然霊となり、4種類ともそれぞれの個性があり、その身元が異なっている。とくに帰幽霊は地上に肉体を持っていた時の記憶は全部生前通り持ち合わせている。したがって、姓名といわず居住地まで判然とこれを証明でき、かつての地上生活を立証してくれる。これを「身元証明」と言っている。幽界入りをして、まだ日が浅い場合では、その霊魂の指導神により、必要とあれば記憶をよみがえらせてくれるのである。

#### 霊魂の身元証明

世の中には、これら何々教団とか、霊媒(この霊媒を「教祖」といい、「聖師」という)が“霊障”といって、これ(憑依している霊)を出す、除霊をするというが、果たして、この身元証明をさせる手段をとっているのか、これが重要な問題である。この身元証明に関して科学的態度というものの上に立っているのが心霊科学者である。身元については、これまで彼らはきわめて厳重な方策をとりつつ、科学的・実験的に霊魂の存在を確認してきた。この確信の実例は数限りなく多数あり、これらの業績の積み重ねによって、霊魂の存在は認められたのである。その最も厳重な態度をとって確信に至った有名な一例に、世界的科学者オリバー・ロッジ博士の事例が知られる。これは戦死した子息・レイモンドが霊媒に憑いて、死後の個性存続、霊魂の不滅を信じさせようとした際、ロッジ博士の調査はあくまでも親子の愛とは一線を画しつつ、科学的態度を取り続けたのである。いくたびかそれを否定しようとしたが、その都度、新しい身元証明によって、わが息子であることを認めざるを得ないことから、ついに死後霊魂によって個性は存続していることを確信することができた。

<註>オリバー・ロッジ著「レイモンド」参照

#### 霊魂と霊界の本質を知らない霊媒の周辺

霊魂は確実に存在する。いや、人間は各人いずれも霊魂の働きによって生命が与えられ、生活し、人生を送っているのである。

ましてや、これら霊魂の働きによって生きているということは一瞬間も、霊魂の世界と無関係で生きていられない。その霊魂の世界との間には連動装置が施されているからである。すなわち、この地上と霊魂界とは一体であるといえる。その結果、霊魂が人間に働きかけ、ある場合には、自らその目的のために各自を守ることもあり、また去ることもある。

その意味合いから、特必要とあれば招霊することもあり、また除霊させなければならぬこともある。しかし、その場合、間違いのない霊でなくてはならない。

霊媒という地上と霊界との架け橋になる存在については、この霊魂の世界（霊界）は一様ではなく、高い世界、低い世界と違ってよいか、神界もあれば、霊界もあり、幽界もあって同一ではないころから、その居住する世界によって、その霊魂の地位にふさわしい霊の力には違いがある。

したがって、霊媒には、多様な霊魂世界の何れの世界の居住霊が背後霊としてついているのかが重要な点となる。霊媒は人間であるが、その霊媒の背後に働く霊によって、その世界との架け橋になるので、高い世界であればよいが、低い世界の居住霊が働いている場合には、その結果は背後霊のもつ力によって低級なものとならざるを得ない、すなわち信頼性が低い。低い世界、幽界というところに居住する霊魂は、そのすべてが感情の持ち主である。残念なことに、その霊媒の霊媒現象は正しいものは少なく、したがって、時として、①高い霊であるがごとくに装い、②霊界以上の高い霊界の様子は分からず、上の世界も見えないのであるが、いかにも高い霊界が判ったごとく、③また、神様（高級霊）とも通信ができないのであるが、それをひた隠しにして、しかも、自らが神様に成り済ます、④以上のようなことを装う場合、しらずインチキをやり、デタラメとなり、芝居となる。

しかもこの芝居といわず、やることなすことが上手い。これが霊媒の行為に現れるのである。そしてその霊媒の人格となるのであるからたまらない。いかにも優秀そうな霊媒に、またいかにも高級霊が働いているように装った状態をでっち上げる。ましてや、背後霊が低い場合を含め、霊はどんな霊でも絶対とってよい、いや低い霊ほど、何かと読心術を発揮して、相手の人、すなわち相談者、霊障されている人、その周囲の人たちまでの心を知る、読み取る。こうして相手の考えを知ることができ、それに基づいて低級霊ほど相手の人をごまかすことが実に巧妙である。そして、この背後霊がやることには本人（霊媒）は、「これが真なり」、「正しい」と思い込まされる。

このような低級霊の働いている霊媒（真の霊媒とはいえない）が、いかにもわが国には多いことか。霊能者、霊媒、教祖、聖師、相談所長といわれている人。それが第三者

が名付け、認めるのではなく、自ら PR をする。そのためのグループが出来る。これが、残念ながら、わが国の今日における実態である。

一般人に注意を望みたいことは、霊媒等に接する場合は、霊に関することは度外視して、まずその人の人間性に対して信頼できるかどうかを慎重に判断を下す必要がある。そしてあくまでも科学的態度に徹することを基盤とするよう心がけねばならない。が、実際は、ちょうど暗示にでもかかったように、これらの人たちの言動を信じさせられてしまうことが多い。いわば“狐にでもだまされた”ように。いや、うっかりすると、こういう事態に引き込まれるのは低い幽界にいる、動物霊などが働いていた結果なのかもしれない。

### 霊媒と背後霊

“霊障” “浄霊” などとって、霊を本人から出せばよい、霊を浄めればよいなどと言っている人々……ことに教祖とか教団人の考えには、ただ、霊魂が悪いという観念を持っていることから、不幸、不運にさせるのは、“憎い霊魂” にまつわる“因縁”のせいであると強調して、霊魂の本質に心をむけない傾向がある。

彼らは、ただ憎い霊は出してしまえばよい。それで幸せは来る、霊を浄める形をとればよいのだと、まことに単純な考えだけを持っている。

こうした考え方をもつのも、実は教祖とか霊媒とか、彼らの背後霊がいかに単純であるかということであり、その霊がいかに低級であるかということの意味するのである。

もしも、これらの教祖とか霊媒の背後霊が高級霊に当たる霊界人であり、ことにその本人の守護霊であるとすれば、そんな単純な考えを持たせることはない。やはり、高い英知の持ち主の霊からの指示によって元来、霊魂の持つ思想の優劣が区別できるのである。どういうわけか、霊媒は背後霊のもつものを唯一正しいとして、何の反省もしない。自らこそ、神仏の代理をつとめるもの、その代表者位に考えている。これがいよいよ増長満となり、その自惚れによっていよいよ背後霊と並び、何の霊的向上心をもたせぬようにさせられるのである。

われわれは心霊科学の上からどういった霊媒にも、必ず、科学的態度をとった審神者（さにお）の必要性を強調するのも、その霊媒を優秀者たらしめ高い世界の居住者である高級霊に、あるいは、現在霊の向上性を発現させて、より高い心霊現象を生起させたいからである。

### むすび

とはいえ、無理もないことで、この対象になる“霊”なるものが肉眼で見えない。しかし、何か、不幸や災いや悩みからの脱出をねがってワラでもつかみたい気持ちでいると、霊媒や取り巻きの人々の口車に乗って信じ込まされる、あるいは間違いない正しいもの、という気持ちにさせられるのである。そうしたことに気がつき、眼が覚めたときにはもはや手遅れである。すでに取り返しのつかない事態に至っている。

この浄霊とか霊障といわれている対象物が果たして真か偽かについて、この根本となるべきことを、十分に解明するために、霊媒のいるところには、われわれは審神者（という霊に対して審査をする人が、ぜひ必要であると強調している）のである。ところが、わが国の実情は、いずれの教団、グループ、霊媒そのものといつてよい、この霊界との交渉にあたる者が上位におかれて、唯我独尊的態度をとっているものであり、周辺も、この建前でPRをして、この霊に当たるものを、絶対に認めさせる方策しかとっていないのである。

このことは、いかに、これら霊魂を対象にしている学問……心霊科学、心霊研究の存在を知らない人が多いかということ、いかに一般人（マスコミ人も含め）に心霊常識が欠けているか、このような意識を持ち合わせていない人が多いかということである。ここから、迷信も生まれるのであり、その温床ともなっているのである。

以上に述べたことは、要するに、霊魂そのものに障りがあるということであるにしても、果たして、その“霊”というものが、正しいものなのであるかどうか疑問がのこる。とかく、霊媒（教祖、聖師）のいうことは、その行っていることには独断的で、観念的といつてよいことが多い。まして、ある特定の方法、ある特定の方式だといつて霊に対処するとはいえ、それがその霊を左右させているのか、単なるゼスチャーに過ぎないのか。それどころか、いかにも神秘性があると考えさせられるところに、何かの術でもあるかのように思い込まされる。それが、まして一般人のいう潜在意識、暗示の類いですらあって、まことに、うっかりならないのである。一般人には、心霊常識がないため、宗教的・秘性に幻錯覚すら起こさせられ、つい、その霊媒の言うことをすべて信じってしまうことになりかねない。

しかし、霊魂の実在は真実である。心霊科学はこの“実在”に対して、あくまでも科学的態度によるべきであることを警告しているのである。

心霊学者カーリントンは霊媒と称する中の5%しか真の霊媒ではないという。まして障りとなる霊魂もいない、単なる霊媒自身の創作の霊魂の場合においてはどのようなことになるであろうか、皆さんにお考えいただきたい。一方で、霊魂に障りがあるとすれば、かえってその本人の自覚からはじまり、その霊の向上の道が拓かれる機会ともなりうる

のである。